



Title	タイポグラフィから読み解く東アジアの文化的変容 : 韓国・日本・中国の比較研究
Author(s)	徐, 慧
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 128-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103744
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

タイポグラフィから読み解く東アジアの文化的変容 — 韓国・日本・中国の比較研究

徐 慧 滋賀県立大学

東アジアにおける文字使用の現状と文化的文脈

今日の東アジア諸国の文字体系は、それぞれ異なる形で定着してきた。日本は漢字と仮名の併用体系を維持している。また新聞や文学では、漢字仮名交じり文が一般化し、縦書きと横書きが共存している。このような様相は、日本社会が伝統的権威を尊重しながらも現代的実用性を放棄しないという均衡的態度を示すものである。中国では、国家が近代化政策の一環として簡体字を導入した。一方、台湾・香港など中国本土以外の地域では、歴史的・政治的背景から繁体字が引き続き使用された。この結果、簡体字と繁体字が地域ごとに併存する状況が生まれた。韓国は、ハングル中心の体系を定着させたが、同音異義語などに漢字が限定的に使われている。このあり方は民族的アイデンティティを強調しつつ、同時に近代化を示す側面も持っている。

日本：伝統と現代の均衡

日本の文字の変化は、近代化と民主化の中で、伝統と現代のバランスを取ろうとした事例である。明治時代の仮名専用運動やローマ字論の登場は、西洋文化を迅速に受容し、国際的地位を確保しようとする試みであった。しかし、漢字は学問的権威や文化的正統性を有していたため、完全に廃止するには社会的抵抗が大きかった。そのため、戦後には教育改革の一環として 1946 年に当用漢字表が制定された。その後、1981 年に常用漢字表、2010 年に改訂常用漢字表が発表され、情報化社会の変化に応じた。これは複雑な漢字を削減し、国

民が容易に読み書きできるようにする措置であり、教育平等の象徴であった。つまり日本の政策は、伝統を守りながら現実の必要に合わせて少しずつ変えてきた、文化変容の一例といえる。

中国：革命と国家改造の象徴

中国における文字改革は、革命と国家改造の象徴的装置である。1919 年の新文化運動をきっかけに漢字改革の議論が始まった。当時の知識人たちは、複雑な字形を簡略化する提案（1910-1920 年代）、白話文の普及（1917 年、胡適の提唱）を通じて、国民教育を広め、社会を近代化しようとした。1956 年、社会主義政権は第一次簡化方案を通じて簡体字を導入し、文盲撲滅と国家近代化を強力に推進した。さらに 1964 年には「簡化字総表」が制定され、標準化が制度化された。2001 年には「中華人民共和国国家通用言語文字法」が制定され、文字使用が法的に規定された。中国の簡体字導入は、単に筆画を減らす改革ではなく、社会主義革命と国家建設の過程で行われた文化的変容である。

韓国：アイデンティティ確立の歴史

韓国における文字の変容は、民族的抑圧の中でアイデンティティを確立するための闘争である。1446 年、訓民正音は創製されたが、長らく漢文中心の国漢文混用体が主流であった。日本統治期の 1911 年には「朝鮮教育令」が公布され、ハングルの使用が抑圧され、日本語と漢字の使用が強制されることで、文字は権力的道具であった。1948 年、

李承晩政権は「ハングル専用法」を出したが、社会ではまだ漢字と一緒に使われていた。1970年、朴正熙政権は「ハングル専用五カ年計画」で教科書から漢字をなくし、急速に漢字を使わなくした。1999年、金大中政権は「国語基本法」を作り、国語中心の体制を整え、漢字教育は大幅に減った。

この流れは、単なる言語政策ではなく、民族のアイデンティティを維持しようとする歴史の中で生じた文化的変容である。

比較分析：共通点と相違点

三国は、いずれも漢字使用を縮小したという共通点がある。しかし、その変化が生じた背景や社会的意味は大きく異なっていた。日本は、戦後の社会が求めた民主化や教育の平等に合わせつつ、昔の伝統も残して、仮名と漢字の併用を通じて均衡を維持した。これは「近代化の中でも伝統を重視する態度」であるといえる。中国は、社会主義革命と大きな社会の変化の中で簡体字を導入した。これは文字改革を超えた新たな国家アイデンティティを作るための象徴でもあった。韓国は、民族的抑圧の歴史を背景に、漢字を排除することで独自のアイデンティティを確立しようとした。これは、単なる言語政策ではなく、韓国社会が自らの文化的アイデンティティを再定義しようとした動きの一つであった。

この比較から明らかになる核心は、漢字を使うか使わないか自体が重要なのではなく、なぜそのような選択がなされたのかという背景と文脈である。日本は「伝統と現代の均衡」、中国は「革命と国家改造」、韓国は「歴史的経験とアイデンティティ確立」という異なる動機を有していたが、いずれも文字改革を通じて社会が望む方向へアイデンティティを新たに構築した例として、文化の変化を示している。

こうした違いは、文字の使用が単なる言語の利便性だけではなく、社会が自らを定義し、世界と関わるあり方を示していることを意味する。漢字

使用の縮小は、単なる効率化を目的とした変化ではない。それは、社会が自らを新たに定義する過程であり、東アジアにおける文字変容に共通する意味を持っている。

結論

日本・中国・韓国の文字政策は、単に文字数を減らす教育行政上の問題ではなかった。それは各社会が自らのアイデンティティを新たに構築する過程であり、したがってすべて「文化的変容」として理解することができる。日本は戦後の民主化と情報化の中で伝統と現代の均衡を選択し、中国は社会主義革命の旗印の下で簡体字を通じて国家改造を推進した。韓国は植民地経験と民族的恨の歴史の中で漢字を排除し、ハングル専用を通じて独立したアイデンティティを強化した。

つまり重要なのは、漢字の使用の有無ではない。その選択が置かれた歴史的文脈と、そこに込められた再構成の意味である。今日、この変容の歴史を振り返ることは、単に過去の政策を再確認することにとどまらない。東アジア各国がどのような過程を経て現在の文字文化を形成し、文化的アイデンティティを構築してきたのかを理解するための視点である。特に韓国における漢字教育の議論は、「実用性」の有無だけで論じられるべきではない。

それは、東アジアの文化的関係と歴史的背景を理解するうえで重要であり、韓国社会が自己のアイデンティティを見つめ直す手がかりとなる。東アジア文化の変容を読み解くことは、東アジアを理解するうえで重要な視点の一つとなる。